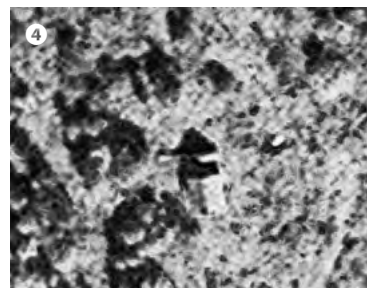
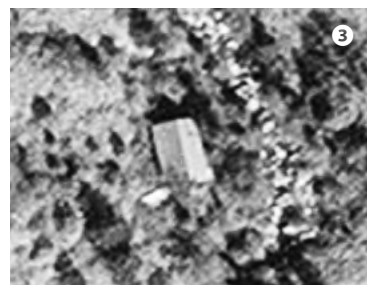




夕張岳周辺概念図

夕張側の新旧ヒュッテと新旧登山道



夕張岳森林鉄道の線路跡をたどって

古い地質図を見ると、白金川上流部にヒュッテの表記があります。昔は森林鉄道に乗り、夕張岳ヒュッテで体を休めて夕張岳に登っていたのでしょう。いろいろ調べてみたところ、昭和52年（1977年）撮影の国土地理院の航空写真（空中写真）に

のヒュッテを目指したが、これは昭和十年頃に拓かれた定番ルートで、歩道の起点に「登山口」の杭が立っていた。昭和十九年にここまで到達した岳線は南部からの直接の入山に途をつけて戦後の登山再興にひと役買い、二十七年までには更に5kmほど奥の二股まで延伸して登山者の人気を高めていた。

は、地質図上のヒュッテの位置に建物が写っていることがわかりました③。森林鉄道の終点は「三股」と呼ばれていましたが昭和37年（1962年）発行の5万分の1地形図「石狩鹿島」には、白金川沿いに特殊軌道線が表記されており、その終点は白金川が3本に分かれるところ三股になつています。先の航空写真には、この位置にも建物が写っています④。木材を搬出するための森林鉄道は、昭和前期に全道各地に敷設され、夕張周辺にも5つの路線がありました。このうち夕張岳線は夕張岳森林鉄道は、シュエパロ川との合流点（のちのシュエパロ湖）付近から白金川に沿って敷かれ、昭和17年（1942年）から39年（1964年）まで運行されていました。

白金川は「しらぎん」「しろかね」「しらがね」「はつきん」など、いろいろな俗称で呼ばれています。国土地理院の2万5千分一地形図には「しろがねがわ」とあり、これが正式名称と思われまふ。夕張岳の蛇紋岩体を最も大きく削削している（削り取っている）川で、夕張岳の蛇

失われた山小屋を求めて

旧夕張岳ヒュッテ探索記

菊地 宏治



私は現在「ユウパニコザクラの会」の事務局を務めております。ユウパニコザクラの会は「夕張岳を愛し、自然を学び自然の恩恵に感謝する心を育み、かけがえのない自然を未来に引き継ぐこと」を目標に活動している会で、会員には長谷川雄助さんや荒田孝司さんをはじめ日本山岳会北海道支部の会員も多いのですが、近年、会員の高齢化という多くの会が共通して抱える問題に直面しています。私は10年ほど前に入会し、長谷川さんや荒田さん、黒川支部長のご紹介で昨年3月には日本山岳会にも入会させていただきました。

白金川沿いにあった旧夕張岳ヒュッテ

さて、夕張岳ではここ2年間、林道の通行止めにより夕張側西側からは登れない状況が続いています。この山に登れない期間に私たちは、森林鉄道跡をたどって旧夕張岳ヒュッテの跡地を訪ねてみようと思ひ、令和5年（2023年）に2回の探索行を実施したので、ここではそのことをレポートしてみたいと思います。夕張岳ヒュッテといつても、ユウパニコザクラの会が建て替えて管理を行っている現在のヒュッテとは全く違う場所です。夕張側からの夕張岳登山道が、かつては今と大きく異なる

ルートだったことをご存知でしょうか？昭和44年（1969年）に西側のペンケモユウパロ川沿いに滝の沢林道が完成し、登山道も造られ、昭和46年（1971年）には現ヒュッテの位置に夕張市営ヒュッテが建設されましたが、それ以前の登山道は、南側の白金川沿いであり（現在の登山道とはガマ岩付近で合流する形）、旧夕張岳ヒュッテも白金川沿いに建てられていたのです。

この旧ヒュッテの管理人をしていた熊谷梅三さんのお孫さんから頂いた写真①を見ると、ログづくりの2階建てで、屋根がトタン張りの作りだったようです。別の写真②には、2階に上がる外階段と小さなテラスも写っています。戦前建設の小屋から昭和30年（1955年）に建て替えられたというこのヒュッテは、昭和40年（1965年）くらいまでは使われていたもので、もしや少しでも原型が確認できる程度に残っていないものかという期待感を持って、旧ヒュッテの探索を企てました。

戦後間もなくの頃の夕張岳登山ルートについては、大夕張営林署管理官だった栗山龍太氏が、平成21年（2009年）発行のユウパニコザクラの会二〇周年記念誌「ようこそ花の夕張岳」に以下のように回想しています。



終戦の翌年、大夕張営林署へ赴任した僕は（中略）南部の貯木場から林鉄（森林鉄道）に便乗して十五km先の岳線（夕張岳線）末端まで行き、白金川右岸山腹の歩道を伝って1kmほど先



紋岩を良く観察できるところです(右図参照)。

旧夕張岳ヒュッテ跡地の探索にあたって問題となったのは、どうやってそこまで行くかでした。白金川沿いの鹿島越林道夕張岳右岸線(夕張岳右岸林道)は途中で崩れていて奥まで入れません。過去の地形図を見てみると、夕張岳森林鉄道の廃線後、その線路跡は昭和50年代まで道路だった可能性があることがわかりました。そこで、なるべく短時間で奥地へ行く方法として、この線路跡を歩くのはどうかと考えました。

1 回目の探索行では 小屋跡にたどり着けず

そうして、いよいよ令和5年(2023年)7月30日に1回目



の探索行を実施しました。朝、5人の参加者が鹿島眺望公園に集合して車で夕張岳林道へ向かいました。白金川で釣りを楽しむ愛好家などがよく利用する林道で道幅も確保されており、はじめは快適な林道走行でしたが、やがて両側の笹が行く手を塞ぐほどになり、路面状況も悪くなる一方で、一抹の不安を感じつつ前進します。30分ほどで夕張岳右岸林道との分岐点(P16図A1地点)に到着。車を停めてこれから徒歩でいざ出発。

白金川にかかる夕張岳右岸林道の上茂橋(A2地点)から白金川沿いの線路跡に入ります。森林鉄道は鉄橋を渡すことで白金川の蛇行をショートカットしながら奥へ延びており、川を遡行するよりも短く、はるかに早く進めます。鉄橋が落ちているところは渡渉が必要ですが、夏は湧水ゆえ、長靴でぎりぎり水が入らない感じの水量です。ただ、浅瀬を探しながら歩を進めるよりは最初から沢靴で歩くのが正解でしょう。渡渉を何度か繰り返して平坦な線路跡が続きましたが、それも束の間、線路跡が崩れて急斜面になっている箇所に出くわしたりと、変化に富んでいます。そうした箇所や笹藪化している部分もあったものの、長い間放置されている割には、概ね歩けてしまいうのが驚きでした。

途中、地層の変化や蛇紋岩の大露頭については、このとき案内していただいたアマチュア地質研究家の堺氏よりレクチャーを受け、地質・鉱石観察の魅力を体感することができました。思いの外しっかりと残っている鉄道の橋梁もあり(5)、雄大な自然の景色の中に役割を終えてひっそりと佇む姿には、鉄道ファンならずとも心揺さぶられる思いでした。傾斜が少なく水平を保っている箇所が多い堅牢な線路の土台(6)は、動物たちにとっても歩きやすいのか獣道、鹿道としても活躍しており、更には新たな植生の形成を手伝っている様子も見受けられ、大変興味深く感じます。蛇紋岩の影響を受けた植物のシソバキスミレやユウバリタンポポも標高の低い地点で確認できました。さらには、エゾサンショウウオの幼生が群れを成す池、巨大な日本ザリガニ、キベリタテハなどのチョウ類の吸水、河原の砂地にアリジゴクが罌を張り、美しいハンミョウが飛び交う様子など、廃線跡には都市部では見られなくなつた光景がありました。



思っていたほどには時間も体力も消耗せず、昼頃には鉄道の終点とおぼしき場所(B地点)に到着。想像したより少々狭い敷地面積でしたが、わずかに鉄製造作物の残骸が確認でき、駅舎跡地であることは間違いないと思われました。このあたりで白金川は大きな二股になつており(すぐ下流の二股も合わせると三股)、栗山氏の言う「奥の二股」とも合致しています。旧ヒュッテに続く「歩道」の痕跡は、繁茂する笹藪に阻まれて目視では見つけることができませんでした。

とりあえず白金川の主流をそのまま進んでいきます。川幅は徐々にですが狭くなり、やがて顕著なゴロ



帯になつてきます。ところどころ藪漕ぎして護岸に上がり、ゴロ帯を乗り越えたりします。川の流れもやや急になり、川幅は一層狭くなります。ゴロ帯は巨岩帯に姿を変え(7)、一つの岩を越えるのにも時間を要するようになってきました。巨岩の下には深い釜があり、このまま沢を詰めるためには本格的な装備が必要な状況。鉄道終点からこんなに険しいルートを伝ってヒュッテに向かうはずもないので、森林帯の中にルートがある

のでしょう。

一度立ち止まって、古い航空写真などを参照して方角を特定しましたが、方角的には間違っていないようです。そこで、ルートを見つけたために小沢をしばし登って探してみましたが、激藪(8)ばかりで、発見できませんでした。時間もなくなってきたので、沢に戻って下山することになりました。こうして1回目のチャレンジでは、残念ながら最終目的地の旧ヒュッテ跡地まで到達することはできませんでした。

2 回目の探索でいかに ヒュッテ跡地を発見

そこですぐに2回目の旧ヒュッテ探索を企画し、9月9日に4人で実施しました。前回断念したポイントは、旧ヒュッテが建っていたポイントから約500メートル手前でした。今回の作戦は、森林鉄道の終点から極力、沢の遡行を避けて、林道跡や登山道跡を利用しながら先へと進むというものです。予め地図でポイントを確認し、探るルートとその都度模索しながら進んで行きました。

前回同様に車で夕張岳林道へ。途中までは、傾斜はきついものの林道自体には大きな傷みも無く、順調に走行ができました。白金川左岸に渡

る橋を過ぎると、林道はかなりワイルドになつてきます。両脇から灌木や笹がかなり覆いかぶさっている箇所が多くなり、道も流水等で掘れてしまつて状態は良くありません。車高のある四輪駆動車でない走行はきびしいものになります。夕張岳右岸林道との分岐点(A1地点)には数台の駐車スペースがありますので、前回同様ここに車を置いて、白金川に架かる上茂橋(A2地点)まで夕張岳右岸林道を下ります。ここまで車で入ることも可能ですが、大きな倒木等もあるので、ここは歩くことにします。

森林鉄道の終点(B地点)からヒュッテまでは、比較的幅の広い連絡路のような道がついていてと思われる、その跡は白金川に沿って続いています。最初は比較的わかりやすかったのですが、少し上流では急傾斜の側壁にジグザグ状に道が付けられていたと思われ、見失ってしまうこともたびたびありました。

白金川右岸側の支流の上流部と思われる平地に出たところで、かつてここに人がいた形跡を見つけました。森林鉄道の終点(B地点)からおおよそ1kmほどのところ(C地点)で、旧ヒュッテまでの距離のほぼ中間地点にあたります。大きな甕(かめ)が十数個(9)、ほかに空き瓶(10)



あり、そこに旧ヒュッテが建っていたと思われる痕跡があったのです。建物の残骸はすべて朽ち果てていて、残念ながらヒュッテの姿は全く見ることはできませんでしたが、ストロープ⁽¹²⁾や釜などの金属類ははつきりと原型をとどめていました。また屋根にあったと思われるトタン板も、建物が崩れた時の状態のまま一部がつかっていました。

最後は意外とあつけない発見に至りましたが、ついに見つけたという達

成感のようなものを感じました。ここからどのようなルートを通って夕張岳山頂まで至ったのか？その当時の湿原の様子や、お花畑（高山植物）の状況はどんな感じだったろうか？興味は尽きません。

往時のヒュッテと登山道に思いを馳せて

現在では当時の状況を確認することはできませんが、旧ヒュッテ関連の写真の中に「ガマ岩」の写真⁽¹³⁾



などが多数出てきました。迷いながら歩いていて偶然発見しましたが、今は動物以外に近寄るものもない場所、笹などで覆われてしまっている、目視で見つけることはとても困難でしょう。おそらくヒュッテまでの

途中にあつた「休憩所」か何かの跡ではないかと思われます。

ここから旧ヒュッテの方角に向かうと1本の大きな支流に突き当たり、これを超えて対岸に渡るか、この支流の沢沿いに高度を上げて林道に出るかの選択に迫られました。沢底まで降りてからまた登るのが大変そうに見えたので、高度を上げながら沢沿いに進むと、すぐに林道に出ました。これは現在通行止めの夕張岳右岸林道です。途中の道の崩壊によって通行止めになって久しいはずですが、車の通行ができそうなくらいに平坦でブッシュもありません。快適な林道歩行はすぐに終わることになります。先が見えない藪漕ぎよりは遙かにましで、今までの歩行がうそのように足取りも軽くなります。問題の支流の沢は林道の下で暗渠になっているので楽に通過して、旧ヒュッテが近づいてきました。



旧ヒュッテが白金川の二股地点にあつたことは、写真や記録を見てわかっていました。しかし、林道はまだ沢からは高い位置にあつて、ヒュッテまでの距離が詰まってきたに、なかなか高度を下げてきません。もしかして、この林道は旧ヒュッテには行きあたらないのではないだろうか？という心配が出てきた時、小さな沢が白金川に向かって下っている地点があつたので、ここから降りてみることにしました。白金川には出ましたが、相変わらずの巨岩帯で、なか

なか沢身に近寄ることは難しく、距離も近いので、また藪漕ぎをしながらGPSに登録したヒュッテ跡地のポイントをめがけて進んでいきます。沢の二股に着きました。水量的にはどちらが本流かわからないくらいですが、右の白金川本流は先にまだ何かありそうな雰囲気です。左の支流はすぐ先で5mほどの滝になっています。そして、この沢のすぐ上部に、確かにそこに旧ヒュッテがあつたに違いないというポイントを発見しました。概ね50坪くらいの平地⁽¹¹⁾が

13



がありまして。現在のガマ岩と比べると崩壊度が少なく、現在のガマ岩にある下部の崩壊瓦礫がほとんど写っていません。全体的に様相も違って見えます。この写真の撮影地点は、旧ヒュッテからの旧登山道上なので、現在の登山道から推測されるおおよその位置は「男岩」の下部で、標高差で100mくらい下から撮影された感じに見て取れます。白金川を遡行して、源頭部を詰めて進んだ先が現在の男岩の標識あたりで、ここから尾根上となるので、ガマ岩方向に進んで行くルートだったのでしょう。左手にあつたであろう前岳湿原などは、この時未開の地であつたと思うと、興味は尽きません。当時は当然木道など無い時代で、さぞかし湿原の歩行は難儀を極めたと思いますが、当時の写真の中には「児童育成會登山記念」と書かれたスナップ写真もあり、大勢の小学校高学年と思われる児童も写っていました。

できることならば、タイムスリップして森林鉄道に乗り、このヒュッテに泊まって、この時代の夕張岳に行ってみたくまりました。ユウパニコザクの会の会員にも、この時の登山道を知る人がいるはずなので、今後機会があればいろいろと話を伺ってみたいものです。

帰りは、夕張岳右岸林道を忠実に



上茂橋(A2地点)まで戻ることになりました。林道は通行止めになって久しく、ところどころ林道の路体が崩れてしまっている箇所や、灌木や笹の浸食が激しい箇所があるものの、アップダウンもなく進んでいけるので、多少の距離の延長はありますが、旧ヒュッテまでは、最初から林道で行くのが楽であると思います。今後は男岩近辺から白金川への下降を体験して、当時のルートに心を馳せたいと思います。